

植田正治と 小さい伝記

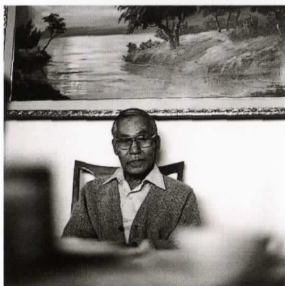
常設展(1階) 植田正治物語——写真するボク展——植田正治の生涯にわたる写真活動の軌跡をご紹介します。(詳しくは美術館までお問い合わせください。)



・1974年



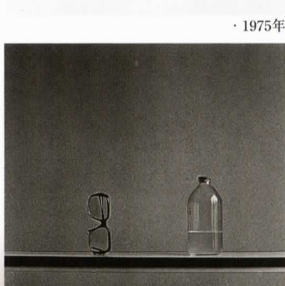
・1974年



・1974年



・1975年



・1985年

〈小さい伝記〉というのは、私にとってはカメラを介しての触れあいの記述というようなものであろうか。写っている人たちにとっては、今日に生きた証しとして、片隅の、小さな伝記になるのではなかろうか。

——植田正治、『カメラ毎日』1982年1月号より
シリーズ〈小さい伝記〉は雑誌『カメラ毎日』に1974年から1985年の12年間にわたり13回発表されました。掲載の各回が断章のように少しずつ違うテーマを持つ作品群は、入手したばかりのハッセルブラッドのファインダーを介した人々との触れ合いから自らの入院にいたるまでの、日々の小さな記録であり、また偶然にも発見された戦前のガラス乾板の焼付けを引き金にたどる写真人生の軌跡をも含んでいます。

正方形の画面の中には山陰の風景や人びとが、そして子どもたちが真正面からとらえられ、カメラを向けられた人物が緊張したり、うつむいたり、照れくさそうに微笑んだりしています。撮影場所は山陰にとどまらず北海道やアメリカにも、また撮影

時期は数日前から半世紀前にも及び、植田は広く題材を求めながら「写真する」自分の歩みを綴っているかのようにもみえます。

フランスの写真評論家、ガブリエル・ポーレは〈小さい伝記〉の連載全体を見渡して「この編集企画の意義は、たとえば過去の写真を見直したり、新作を発表したり、註釈の言葉を帰納の場とすることで自分の方法をさらにはっきり画定、定義するといったことに尽きるものではない。この連載の営み自体が作品そのものの像として姿を現すのだ。そして同時に、作品の背後にありながら作品自体と混じり合っている者の人生の像として、出現するのだ。」(『写真のディスコース・断章』より)と指摘しています。

今回の展覧会では、さまざまな要素を内包するこの〈小さい伝記〉の作品群をあらためて検証しようとするものです。植田の〈たどってきた道〉——〈伝記〉をご覧いただくことで、やさしさとユーモアに満ちた写真の魅力を感じていただけることでしょう。

会期 ● 2006年4月22日(土) — 7月9日(日) 午前9時から午後5時 ただし閉館の30分前までにご入館下さい。

休館日 ● 毎週火曜日(火曜日が祝祭日のときは翌日)

入館料 ● 一般800円(700円)、高校・大学生500円(400円)、小・中学生300円(200円) ()内は20名以上の団体料金です。

主催 ● 伯耆町 / (財)植田正治写真美術財団 協力 ● 王子製紙株式会社

植田正治写真美術館

伯耆町立 鳥取県西伯郡伯耆町須村353-3 ☎689-4107 Phone.0859-39-8000 Fax.0859-68-3600 Homepage <http://www.japro.com/ueda/>

